

# 有田川流域の地理学的考察

## — 蜜柑栽培を中心として —

児 島 淑 子

論文は次のように構成されている。

### 第一章 地 域 概 観

#### 第二章 自 然

##### 第一節 気 候

##### 第二節 地 形

### 第三章 土 地 利 用 の 変 遷

##### 第一節 水 田 利 用

##### 第二節 果 樹 園 利 用

##### 第三節 畑 地 利 用

### 第四章 蜜 柑 栽 培 農 業

##### 第一節 蜜柑栽培と自然条件の克服

##### 第二節 蜜柑園増殖傾向

##### 第三節 水 田 転 換

##### 第四節 農 業 経 営

##### 第五節 出 荷

### 第五章 ま と め

調査地域は、西は紀伊水道に面し、東北南は長峰山脈、白馬山脈によって囲まれ、地域中央部の有田川流域の平野、及び湯浅湾に面した山田川、広川流域の沖積地以外に低地はない。行政的には有田市、有田郡吉備町、金屋町、湯浅町を含んでいる。

#### § 自 然

第二章 それに関連づけて第四章第一節では、農業のbaseとしての自然を取り扱った。気候条件からみて、当地域は蜜柑栽培にとって有利な条件を持っている。しかし、夏の高温時における旱害、台風害、北西季節風の影響がある。地形的には隔海度が小さく、海の影響もかなりうけている。

地形分類は、主に空中写真により行なった。

#### § 蜜 柑 栽 培

当地域の蜜柑栽培は栽培の種類が多く、明治中頃迄、紀州蜜柑が広い面積を占めていたという事

は、古い伝統的な栽培地である事を示すものである。その後、温州蜜柑がこれにとって変わり当地域は和歌山県の核心地域として発展してきた。蜜柑園は従来、傾斜地に石垣積みの階段畑をつくって利用していたが最近、平地への進出が見られるようになった。これは地形の影響をうけ、排水のよい沖積錐段丘面上からはじめられたが、最近では、土地改良や排水整備により沖積地にも進出してきた。最近の10年間をみると、S37、38年に増殖のピークを示し、大部分の水田が蜜柑園に変えられ、水田のない農家、1~2反しか持っていない農家がふえている。増殖傾向を市町毎に考察してみるとかなりの差がみられるが、その原因は歴史と自然条件である。最も水田転換の盛んな有田市は歴史も古く適地は開墾されてしまったために、水田への進出も早かったと考えられる。当地域では今後も増殖が行なわれ、ますます蜜柑単一経営地域としての性格を強めていくと思われる。

出荷についてみると、S28年の水害を契機として共同化が大きく進められたが、出荷機構、出荷器、出荷先などに昔からの伝統が生きている。

## 松本盆地南部の地理学的考察

鈴木 みやこ

調査地域は長野県のほぼ中央にある松本盆地の松本市以南を占める。中央東線と西線の分岐点である交通の要地の塩尻を中心とした地域の農業の考察を行なった。但し盆地南部は台地の地形が広く、これを反映して畑作農業が卓越しており、北部の水田の卓越する地域と対照的であることから盆地南部の地域性を特色付ける畑作農業の商品作物栽培について調査をすすめた。

北流する奈良井川、鎖川により形成された扇状地は開析され、3つの台地となってこの地域の広い部分を占める、桔梗が原、今井原、古見原と呼ばれ、信州ロームが扇状地礫層上をおおい、果樹栽培、トマトや洋菜を中心とした蔬菜栽培がさかんに行なわれている。信州ロームの堆積は耕土が酸性になる欠点はあるけれども、現在行なわれている蔬菜や果樹の栽培には、ある程度の深さの耕土とローム層の保水性が水の少ないこの地域では有利な条件である。又広い平坦な地形面の存在が農作業を能率よくさせ、多量な栽培を可能にしており、農家一戸当りの耕地も比較的広く、生産を安定させる。

気候について見れば、内陸盆地に特有な、かなり乾燥した、寒暖の差のある気候を示し、又本地域が標高700m前後であるので高原に似た涼しさを示し、高原野菜の栽培が行なわれ、市場条件の